
ブラジリアン・ハイキック ～天使の縦蹴り～

須藤彦吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラジリアン・ハイキック ～天使の縦蹴り～

【Nコード】

N2288Y

【作者名】

須藤彦吉

【あらすじ】

拠所ない事情でやったこともない空手道場に入門したボク、三浦亮太。そこで出会ったのは同級生の栗原玲央。どこか翳のある彼女と友だちになれたのはいいけど、ボクにはそんなことで浮かれている余裕はなかった。ある事情があって、ボクは今すぐにでも強くなる必要があるのだ。

『この小説は筆者の別サイトから改稿・転載したものです』

1. 出会い

「……えーつと、じゃ、ここに名前と住所書いて。それと、ここに男子 っるところにマルね」

応対に出た三〇歳位の男の人はそう言って、ボールペンの尻で入会申込書の性別の欄を指した。

空手の師範代よりは塾の先生のほうが似合いそうな線の細い、正直言って頼りなさそうな顔立ち。おまけにボソボソ声で何を言ってるのか、ものすごく聞き取りにくい。道着姿なのにまったく強そうに見えないこの人を師範代と呼ぶのはちょっと いや、かなり躊躇われる。

名前を書こうにも、ペンはこの人の手の中にしかなかった。仕方ないので自分のペンを出して、言われたところに自分の名前を書いた。

「三浦亮太くん、か。よか名前やねえ」

「……どうも」

ペコリと頭を下げた。他になんと言えはいいんだろつ。

香椎かしいのど真ん中にある雑居ビルの二階にある空手道場。だから、そんなに広くはない。こういうところのお約束どおりに天井からはサンドバッグが、壁には額縁に入った賞状、やけに達筆な字で 鍛錬 と書かれた掛け軸なんかが見よがしに掛けてある。

奥に更衣室と倉庫はあるようだけど他に部屋はなくて、ボクと師範代は隅っこの畳が敷いてあるスペースで、卓袱台のような小さなテーブルを挟んで向かい合っていた。一応は胸くらい高さの衝立で囲われているので、ここが事務室ということらしい。

師範代はボクの「入会したいんですけど……」という声に、ちょっと薄気味悪いくらいにこやかに応対してくれた。

理由は足を踏み入れて三分以内に想像がついた。

言っちゃ悪いけど、この道場には活気というものがまるで感じられなかった。寂れているというほどひどくはないし、設備だって古ぼけてはいないのだけれど、そこにある何もかもがちよつとずつ煤けた感じに見える。その証拠に道場生の名札を掛けるフックにはずいぶん空気が目立っている。祭日の昼下がりなせいもあるかもしれないけど、道場で練習している人は一人もいなかった。

ひよつとして道場選びを間違ったか？

そう思ったけれど、だからといって他に選択肢はなかった。ボクが通っている塾がここのすぐ近くにあるからだ。塾通いはちゃんと続けるといのが道場通いをオーケーしてくれる条件である以上、あまり離れていては都合が悪い。

学校が終わって家に帰る。着替えて西鉄の三苦みつまき駅から宮地岳線みやじだけに乗る。香椎に着いて塾へ。受ける授業にもよるけど終わるのは早くても七時か八時。それから家に帰って違う方面にある道場に行くのは時間のロスがありすぎる。それに三苦・香椎間の定期券は塾用があるけど、それとは別に定期を買ってもらうのはさすがに気が引けた。仕事と接待に明け暮れる ホントかどうか知らないけど 父親に送り迎えを頼むのはもつと気が引ける。

そういうわけで、香椎以外の場所は都合が悪かったのだ。

まあ、空手初心者 というより運動初心者 のボクにとつては、みんながバリバリにやっているとところで相手にされなかつたり場違いな雰囲気顔を伏せたくなるよりは、ちゃんと指導者がついて一から教えてくれるところのほうがいいに違いない。ちよつと無理があるような気がするけど、そう自分を納得させることにした。

師範代はそんなボクの思いになどまるで気づく様子もなく、淡々と月謝のことを説明していた。

月謝のことはあらかじめ調べてあつたし、ちゃんと用意もしてあつた。入会金と二カ月分の月謝を入れた封筒を差し出した。師範代はそれが当たり前のような顔をしていたけど、口許が微妙に緩ん

でいるのをボクは見逃さなかった。

「じゃあ、これ。ご両親に承諾書は書いてもろてきて。それとスポーツ傷害保険の申し込み書も書いてもろうとかんといけんねえ。脅かすつもりはなかけど格闘技やけん、怪我することもあるしね」

師範代は次々に書類やパンフレットをテーブルに置いて、それを大判の封筒に入れた。

「ありや？ 領収書の綴りがなかね。ちょっと待って」

ブツクサ言いながら向けられた背中はそれなりに大きかった。帯もちゃんと黒だ。道着の裾がほつれて糸が伸びているのが見えなかつたら、少しはこの人のことを見直していたかもしれない。

「ここへはどがんやって来ると？ バス？」

年季が入ったキャビネットを引っ掻き回しながら、師範代は言った。

「いえ、西鉄で。家は美和台みわだいなんで」

それがどうしたというんだろう？

「君、三年生やる。やったら栗原って女の子、知つとう？」

「栗原さん……ですか？」

福岡市の中でも東区は団地が多くて、そのせいか、ボクが通う中学校は市内有数のマンモス校だ。ボクらの学年も八クラス、三〇〇人以上もいる。おまけにボクは今年の春に転校してきたばかりだった。

他にもいろいろと拠所ない事情 正直、女の子とはあんまり上手く話せないとか、それ以前に転校生のボクにはそれほど顔見知りがないとか もあって、苗字だけで誰かなんて分からなかった。

「栗原、なんていうんですか？」

「玲央れお」

……なんだって？

「ひよつとしてその子、背が高くて、髪が短くて、目つきがやたらと鋭い」

「うん、そがん感じやね。上原多香子に似とらんこともなかかな？」

師範代の諭えをよそ該当する人物の影が脳内スクリーンに像を結んだ。ボクは戦慄を覚えた。

「……そ、それってまさか、ボク」

「誰がボブ・サップねってッ!？」

唐突な怒鳴り声に続いて、ゴツツという鈍い音と共に目の奥で火花が散った。

「いつてえッ!！」

思わず頭を押さえて振り返った。

衝立から身を乗り出して手　　と言うか、拳　　を伸ばしていたのは、男と間違われるくらいのショートカットの道着姿の女の子だった。面長の整った顔立ちなのは否定しないけど、上原多香子は言い過ぎだ。

「あの……栗原、さん？」

「いまさら遅かって。まったく、そがんことは本人に聞こえんこと言わんね」

「だ、だって、いるなんて知らなかったし……」

「せからし。男の子が言い訳せんよ」

彼女　栗原玲央は憤怒の表情のまま、大股で衝立を回って近づいてきた。

子供の頃は女子のほうが男子より成長が早いとはいうけれど、彼女はいまだに男子から打倒を叫ばれる長身を維持している。おまけにボクは座っているのです、余計に見上げるような格好になってしまふ。

その強烈な仇名の割に、ボクは彼女のことをほとんど知らなかった。クラスが違うので　ボクは二組、彼女は七組　　ろくに話したこともない。知っているのは空手をやっているらしいことと、各運動部の顧問がスカウト合戦を繰り広げたほどスポーツ万能で、しかもその全部を蹴ったという逸話くらいだ。

それともう一つ。学年の中のちょっとワルそうなグループの面々も、彼女にだけは手を出そうとしない。出せばただでは済まないこ

とを知っているからだ。

ボクは友人の杉野から聞かされた、彼女の仇名の由来を思い出した。

元ネタがその長身なのは丸分かりだけれど、空手使いの彼女には別のファイターが充てられてもおかしくなかった。ニコラス・ペタスとかアンディ・フグは格好良すぎても、武蔵とか角田信朗あたりならネタとしても悪くない。

実は彼女が ザ・ビースト 扱いされているのは、デビュー・イヤーにサップがアーネスト・ホーストを圧倒したのと同じように、彼女が入学した最初の年に幅を利かせていた三年生の不良少年たちを瞬殺したからだそうだ。

ちよっかいを出したものの手厳しく撥ねつけられた不良少年が、捨て台詞で言っではならないことを口にした、というのが彼女が激昂した理由の定説だとボクは聞いている。

不良少年が何を言ったのかは誰も語ろうとしないので、ボクも詳しいことは知らない。杉野がその話をしてくれているときに、たまにたま廊下を通りかかった彼女の胸元 お世辞にも豊かとは言えない を見ていたことと関係あるかどうかも分からない。命が惜しいので確かめたくもない。

「なんや、玲央、おつたとや？」

師範代はたつた今、自分の背後で起こったことにまったく興味を示していなかった。彼女はこれ見よがしにフンと鼻を鳴らした。

「おつたら悪かと？」

「悪うはなかけど。彼、新しか練習生。同じ学校やったら気心も知れとうやる。仲良うしてやって」

「別に気心とか知れとらんけど……。ま、とりあえず、いたぶり甲斐はありそうねえ」

「おーい、変なこと言うなって」

「ジョークって。よろしくね、三浦くん」

「……ああ、うん、よろしく」

やっぱり、道場選びを間違ったな。

月謝はまだテーブルの上にあった。今ならまだ封筒を引つつかんでダッシュで逃げられそうな気がする。

でも、彼女は足もかなり速かったはずだ。いつか、クラスマッチのソフトボールでボテボテのゴロをことごとく内野安打にして、対戦相手から「イチローかよッ！」と野次られていたのを見たことがある。一〇〇メートル十六秒台のボクの鈍足では到底敵いっこない。追われるウサギが逃げるのに失敗すれば、それは死を意味する。迷っている間に封筒は師範代の手の中に納まった。万事休す。

「三浦くん、こがんとこに通ったことあると？」

玲央の声にはどことなく意地悪な響きがあった。ボクはちよっとムツとしたけど、嘘についても仕方がなかった。

「……ないけど」

「あつそ。んじゃ、特別にデモンストレーション見せてあげよつか」
彼女はそう言い残すと、スタスタと道場の隅のサンドバッグのほうに向かった。何をやるつもりなのか、ボクは彼女から目を離すことができなかった。

軽いステップを踏んでリズムをとった。ボクは格闘技は見る専門だけど、その分だけ知識や見る目には自信があった。彼女の身のこなしには　なんと言うか　実戦の匂いがした。流行りの言い方をするならオーラがあった。

ヒュツという短い息吹が続いて、見ているこっちの骨まで軋みそうなドスンツという重い音が響いた。右のミドルキックを放ったのだと分かったのは、彼女が脚を床に戻したあとだった。その後も立て続けに蹴りが入った。サンドバッグがまるでダウン寸前のファイターのようにゆらゆらと揺れる。とても中学生の女の子の蹴りの重さじゃなかった。

「　セイヤアー！！」

最後の一発、首を蹴り落とすようなハイキックがひときわ重い音をたてた。彼女は残心と共にフーッと長い息を吐くと、揺れるサン

ドバッグを手で押さえてボクにニツコリと笑いかけた。

おそらく親しげな笑みのつもりなんだろう。けれど、ボクには身動きのできない、あとは引き裂くだけの獲物を見つけたライオンの微笑にしか見えなかった。

2・友だち

今日は見学だけということ、練習はしないで道場を後にした。

本当は今日からでもやるつもりだったのだ。けれど、空手はおるか運動系の習い事などやったことがないボクには、いったい何を用意すればいいのかわからなかった。一応、事前に近所のスポーツショップを覗いてはみたけど、買ってから「ああ、これは違う」なんて言われたら目も当てられない。誰かに相談しようにも、家族以外には空手を始めること自体を内緒にしていたのでどうしようもなかった。

ボクがそう言うと、彼女は「一緒に着いてつて、いろいろ教えてあげる」などと言い出した。鼻屑てんしんにしている店が天神てんじんにあるらしい。そんな街中まで行かなくてもと思ったけれど、彼女はボクが言うことなんか聞いちゃいなかった。

そんなわけで、ボクらは西鉄バスで天神方面に向かっていた。話には聞いていたし、バスというのはどこも荒っぽい運転をするものだけ、信号機が黄色になった瞬間にアクセルを踏んで交差点に突入するバスには福岡に来るまでお目にかかったことがない。

「で、なんで空手はじめようって思ったと？」

屈託のない様子で彼女が言った。ボクは返事をせずに、ずっと車窓からの見える街並みを眺めていた。

バスは国道三号線沿いの筥崎宮はちさきみやの前に通り掛かっていた。放生会とかいう秋のお祭りの時期なんだそうで、とんでもなく大きな鳥居がある参道に出店がたくさん出ているのが見えた。どうでもいいけど、ボクはこのお祭りを「ほうしょうかい」と読んでかなり笑われた。悔しいので辞書で引いたら「ほうじょうえ」だったのでそう言い直すとさらに笑われる羽目になった。福岡では　　というか、福

岡だけらしいけど　これで「ほうじょうや」と読むらしい。そんなこと、よそ者に分かるもんか。

たっぷり時間を置いてから、ボクは口を開いた。

「……別に。なんだっていいだろ？」

「まあ、そうやけどさ。学年トップの秀才くと空手が結びつかんかったとよねー。受験とか控えとうとにさ」

自分だってそうだろ、と思ったけど口にはしなかった。代わりに訊いた。

「栗原さん、ボクのこと知ってたの？」

「名前だけね。こん前のテストで高居さんたかい負かしたる？」

「……ああ、それで」

高居さんというのは学年一の才女で通っている子だ。今どき珍しいお下げ髪と黒縁のセルフレームのメガネがトレードマークで、休み時間にはカフカヤドエトエフスキーの文庫本を手放さないという話を聞いたことがある。一年生の最初のテストから三年生の一学期の期末テストまで、順位が出るあらゆるテストでトップを守り続けてきたらしい。それを夏休み明け早々のテストでボクが破ってしまったというわけだ。

入試ならともかく校内テストで順位を競っても仕方ないと思うんだけど、高居さんは首位陥落以降、廊下ですれ違うたびにボクを呪い殺すような視線を投げかけてくる。この頃、夜中に胸にキリキリした痛みを感じることもあるのは気のせいだろうか？

いや、それより彼女がそんなことを知っているほうが意外だった。

「栗原さん、他人の成績になんて興味あるんだ？」

「そうやなかけど、あの子とは同じクラスやけんね。それに一応、幼馴染みたいね。同じ官舎に住んどうたこともあるし」

「官舎？」

「ウチの父さん、警察官。　あ、ごめん、お茶取って」

ボクはバスに乗る前に買ったお茶のペットボトルを手渡した。彼女はキャップを捻って口をつけた。白い喉が動くのを横で見ている、

ボクはちよつとだけドキツとした。

天神のど真ん中、中央郵便局の前でバスを降りた。

意外と都会なんだな、というのが春先に初めて福岡に降り立ったときのボクの印象だった。東京のように気忙しい感じはしないけど人でごった返していて、人ごみ慣れしてないボクはその熱気に圧倒されそうになった。

天神というのはよそ者から見るとちよつと不思議な街だ。あまり高いビルはなくて 街のすぐ近くに空港があるからだそうだ

同じくらいの高さのビルが延々とメインストリートを挟んでいる様子は、文字通りにビルの谷間という言葉を連想させる。特に天神周辺はそれらのビルのほとんどが地下街と繋がっていて、まるで街全体が一つの建物のようにさえ思える。

「で、君の行きつけってどこにあるのさ？」

「しんてんちやう新天町 って言うて転校生に分かるかな？」

「アーケードの入口にからくり時計があるとこだろ。それくらい知ってるよ」

「へえ。天神に遊びにくると？」

「たまにね」

遊びにというのは事実と異なる。母親と姉貴のお供で買い物に連れ回されるときしか来ないからだ。実はからくり時計もテレビで見ただけ知ってるというだけだった。

ついでに白状してしまうと、こうやって女の子と二人で街を歩くのは初めてだった。それがあまり緊張しないで済んだのは、こう言っちゃ悪いけど、彼女がまるつきり女の子っぽくなかったからだ。

着ているのはタンクトップとTシャツの二枚重ねにリーヴァイスのジーンズ、FDHのロゴが入った野球帽。足元はアディダスのスニーカー。アクセサリの類はまったく身につけていないし、バッグも持っていない。当然、プリクラを貼りまくった手帳もない。携帯電話のストラップも飾り気のない、文字通りのストラップ（紐）だ。リップクリームを丁寧塗っていたのが、唯一の女の子っぽい仕草

だった。

アーケードの入口にあるスポーツ用品店　という表現がピツタリの店だった　で道着やサポーター、帯、タオルやＴシャツなどを買った。着心地は重要だと彼女が力説するので、ちよつと高かったけど柔らかい生地のものを選んだ。成人用では身丈はともかく横幅が大きすぎてジュニアサイズを選ばなければならなかったのが、ちよつとだけ気に入らなかった。帯は当然ながら白だ。

「栗原さんって黒帯なんだろう？」

さっきの右のミドルからすると、そうであつてもおかしくないよ
うな気がした。ところが、返ってきたのは意外な答えだった。

「白帯。道場じゃハツタリのために色帯締めとうけど、もともとウチって色帯制度なかとよね」

「そうなの!？」

「うん。まあ、本当は昇段試験を受けとらんってだけやけど」

「どうして?」

「メンドくさいから。それに、黒帯とつたら、ケンカンとき凶器扱いになるやん?」

「……そういう問題?」

彼女は素知らぬ顔をしていた。

買い物を終えて、同じアーケードの中にあるドトールに入った。

何か甘いものでも頼むのかと思っていたら、彼女は一番大きなカップでホットコーヒーを注文した。砂糖もミルクも手にする様子はないかった。

目の前で女の子がブラックを飲んでいのに、自分が甘い飲み物にするのは子供に見られるような気がした。なので、ボクもブラックにした。くだらない見栄だということには分かっている。

ボクはコーヒーを啜った。あまりの苦さに顔をしかめそうになるのを懸命に堪えた。彼女はボクと違って平然とコーヒーを飲んでい
た。

「三浦くん、イバラギから来たやつたっけ?」

「イバラギじゃなくて、イバラ”キ”だよ」

九州では、茨城はまず間違いなく彼女のように発音される。全国ニユースのアナウンサーでも間違える奴がいるくらいだから無理ないのかもしれないけど。

彼女はプウッと頬を膨らませた。

「そがん嫌味つたらしく訂正せんでもいいやん。こっちの人間は知らんとやもん。三浦くん、向こうにおったとき、佐賀県の場所とか知っとな？」

痛いところを突かれた。

「ゴメン。福岡の隣は長崎だと思ってた」

「そうやるお？」

それからしばらく、彼女はボクがどんなところにいたのかを聞きながらたがった。生まれてこのかたずっと福岡で、親類縁者もだいたいそのうなので、よその土地のことはあまり知らないらしかった。

ボクは自分が転々とした土地のことをとりとめもなく話した。福岡に来る前に住んでいたのは千葉県との県境で、利根川流域のその辺り一帯はチバラキと呼ばれて田舎扱いされているという話がなぜか異様にウケた。

「やったら三浦くん……」

「なに？」

「また転校するかもしれない？」

彼女の声に残念そうな響きがあるのがちよつとだけ嬉しかった。

「かもつていうか、まず間違いなくね。もう慣れたもんだけど」

「そんなもん？ アタシやったら耐えられんかも」

「友だちと離れ離れになるから？」

「うーん、それより、知らんとこで新しく友だち作るとが大変そう。アタシ、ずーっと福岡に住んどつとに友だち少なかし」

「そう言えば、確かに君が誰かをつるんでるとこ、あんまり見ないような気がするね」

学校で特に浮いている感じではないし、彼女のことを悪く言う人

間もないのに、彼女が誰かと仲良くしている場面を見た記憶はまるでなかった。どちらかというとな彼女はいつも独りで、まるでその場にいないように振舞っているように思えた。

それだけじゃない。ボクのような拠所ない事情もないのに、ついでに言うなら、そんなにレベルの高い道場でもないのに、家から離れた香椎まで通っていることも、ボクが彼女に対してそういう印象を持つ理由だった。

「……やっぱ、そがんふうに見えようとかなあ？」

彼女は頭の後ろで手を組んで、思いつきり背もたれに身体を預けた。小さく口を尖らせて視線だけを天井に向けた。

「苦手つたいねえ、友だち付き合いとが。なんでみんな、あがんしようにもなかことで楽しそうにできるとかなあ？」

「しらける、そういうの？」

「そつやないけど……」

彼女が同世代の女の子と感覚が合わないのは、ほんの数時間話しただけのボクにもなんとなく理解できた。ただ、彼女の何がそうさせているのかまでは分からなかった。

しばらくお互いに押し黙ったまま、コーヒーをすすった。

何と言えがいいのか、すぐには思いつかなかった。女の子と付き合ったことがないボクには、こういうときにどう対処すればいいかなんて経験の蓄積はない。

それでも凜々しい顔に寂しそうな翳を浮かべた彼女を見ていて、ボクは何か突き動かされるように口を開いた。

「あのさ、もし……もしボクで良かったらだけど、友だちにならな
い？」

「へっ!？」

彼女は心底意外そうな顔でボクを見ていた。自分がどんな顔をしているのかは分からないけど、もしその場に第三者としていたのなら、おそらくボクも同じような顔をしているはずだった。

「……三浦くんとアタシが？」

「そう。ボクらは二人ともあんまり人付き合いが得意なほうじゃないし、周りの連中とじゃ上手く付き合えない。でも、友だちが要らないってわけじゃない。幸いにもボクらはお互いに、その面倒さをよく分かっている。だったら、相手の気持ち分かる同士で友だちになれるんじゃないかな」

我ながら怪しい理屈だな。要するに同病相憐れむということじゃないか。

「……どうかな？」

「えっ？ うん、そうやねえ」

彼女は戸惑いを隠さなかった。しばらくボクをジッと見つめて口をちよつとだけ尖らせている。

自分でも何故、そんなことを言い出したのか、不思議でならなかった。せつかくちよつと打ち解けてきていたのにこれで台無しだ。

いつものボクならここで「あ、いや、嫌なら別にいいんだけどさ」とか、適当にその場を取り繕おうとしただろう。

ところが、今のボクにはそんな考えはまるで浮かばなかった。何故だか分からないけれどここで引き下がってはいけないような気がした。

「駄目かな？」

ボクは重ねて訊いた。玲央はフーッと長い息をついた。

「……よかよ。そこまで言うなら、そういうことにしようか？」

「ホント？」

「うん。でも、道場じゃアタシが姉弟子ってこと忘れんでよね」

「りょーかい」

ボクがそう言うと、玲央はようやく小さな微笑みを浮かべた。

3・焦り

ボクが空手道場の練習生になってから一週間が過ぎた。

塾は週に三回だけど、道場にはどうしても外せない用事があった一日を除いて毎日、顔を出していた。ボクは一度始めたことはなかなか辞めないほうだけど、今回は続かないと思っていたらしく、家族はビツクリしていた。

尤も、その間にやったことと言えば全身の関節が悲鳴をあげるようなハードな柔軟体操と、基本的な立ち方、足の運びの練習くらいだった。

格闘技には詳しいほう　ただし見る専門　なので、ズブの素人がいきなり実践的な練習をさせてもらえないことくらいは分かっていた。それに立ち技系格闘技の基本のすべてが土台になる立ち方にあることも分かっている。だから、それらの練習がつまらないとは思わない。

ただ、ボクにはあまり時間がないのも事実だった。

「ねえ、ちよつといいかな？」

道場に人がいない日曜日の午後、ボクは玲央に声をかけた。さっきまで三戦立ち《さんちんだち》の練習をしていて、素人にはちよつと不自然な足の置き方をしていたせいで足首が痛い。鍛えていないとそうなるらしい。

玲央はキョトンとした顔をボクに向けた。

「なん？」

「いや、訊きたいことがあるんだけど……何やってんの？」

「柔軟」

いや、それは見れば分かる。ボクが言っているのは、それが空手道場でお目にかかる類の柔軟体操じゃなかったことだ。

前後に開いた両脚はペタンと床にくつついている。玲央はその体勢のまま、長い息を吐きながらゆっくりと上半身を前に倒していった。やがて頭から胸、腹のあたりまでが伸ばした脚の上にぴったりと折り畳まれていく。

その動作にはまったく無理をしているところがあった。伏せた状態のまま両手を前に出してつま先を軽くつまむと、彼女はまるでなだらかな曲線を描く細長いオブジェのように見えた。

ボクはしばらく玲央の様子に見とれていた。玲央は時間をかけて身体を起こすと足の開きを一八〇度変えて、今度は反対の脚の上に同じように倒れ込んだ。

「身体、軟らかいんだなあ」

玲央はさつきと同じようにゆっくりと身体を起こした。

「当然やん。っていうか、身体が硬い格闘家とかあり得んし」

「そうなんだ。いつもこんな時間に時間かけてやるの？」

「そう。怪我しとくないけんねえ。で、訊きたかことって何？」

ボクは口を開こうとして、思い直して首を横に振った。

「ううん、なんでもない」

玲央のような上級者が基礎を大切にしているのに、素人のボクがそれをすつ飛ばすなんておこがましいにも程がある。彼女に背を向けて、教わったとおりに肩幅に開いた足を八の字に置くところから練習を再開した。

背後で彼女が立ち上がる気配がした。

「ねえ、亮太。今日はこん後、何か予定あると？」

「いいや、何も無いよ。今日は塾は休みだしね」

「じゃあ、一緒に帰らん？」

「一緒に？」

思わず声が裏返りそうになった。

狼狽するのにはそれなりに理由がある。香椎近辺ならともかく、電車の中では誰と一緒にいるところを見られるか分からないからだ。男子と女子が一緒にいるとくだらない噂を流す奴はどこにでも必

ずいる。

朝、教室に入って黒板に相合い傘が落書きされていたりすると、どれだけヒマなんだと呆れてしまう。とは言え、自分が書かれる立場になれば笑ってもいられない。事実と違うからと否定すればするほど泥沼になるのが、この手の噂話の特徴だからだ。囃し立てる側からすれば事実がどうかなんてどうでもいいので、唯一の対処法は「相手にしないこと」という消極的なものにならざるを得ない。

「大丈夫かな？」

「アタシは見られたって構わんけどね。友だち同士で一緒に電車に乗るとつて、別に悪かことやなかる？」

「……まあ、そうだけだ」

玲央は「それがどうした？」と言わんばかりだった。確かに彼女を相手にそんな噂を流す命知らずがいるとは思えなかったし、流されたとしても彼女の場合、本当に「ふくん、そう？」の一言で流してしまいそうな雰囲気はある。

彼女がそうなのに、ボクが気にするのもおかしい話だった。もしスクープされたらそのときに考えるしかなさそうだ。

そんなわけで帰り道、ボクと玲央は二両編成の宮地嶽線みやじだけの電車に揺られていた。

もともとそんなに乗客が多くない路線な上に通勤客がないので、車内はひどくガランとしている。同じ学校の生徒らしき人影はない。車両はおそろしくレトロで、窓は下半分だけがスライドするという田舎のバスでもなければ見ないような開き方をするし、天井には冷房の弱さを補うように扇風機が取り付けてある。詳しいことは知らないけど、利用客が少ない宮地岳線は同じ西鉄の別の路線の使い回しで、新しい車両は入ってこないらしい。

鉄道ファンだったらさぞ狂喜するところだろう。が、ボクはそっち方面にはあまり興味がない。

「 だけん、親指を中に握り込んだらダメって言いよるやん。殴った拍子に折れたらどうすると? 」

玲央はボクの手を見て言った。知り合いの目がないというのもあってか、玲央の表情にも学校で見せるような素っ気なさはなかった。お互いにそんなに話し上手でもないのに、会話はやけにはずんでいく。

問題はその内容がまるつきり道場での会話の延長線上にあることだ。ボクがふざけ半分で作ってみせた正拳突きせけんつきの拳の握りがお気に召さなかったらしい。

「 えーつと、こう? 」

「 うーん、さつきよりよかけど。指はしっかり巻き込んで、親指と小指で締め上げるイメージで握るとよ。そうせんと拳が緩うなるし、拳頭が目標に当たらんけんね 」

「 拳頭? 」

「 拳を作ったときにできる指の付け根の骨の出っ張りのこと。空手の突きに限らんっちゃけど、パンチっていうとはここ 」

玲央はボクの手をとってその拳頭を押さえた。前触れもなく手に触れられてビックリしたのをボクはなんとか押し隠した。

「 こん部分は意識して殴るとよ。指の背の面全体は当てるっちゃなくて 」

玲央はボクの顔の前で自分の拳を握ってみせてくれた。

女の子の手が見るからに硬そうな武器に早変わりするのを、ボクは感嘆混じりに見ていた。手のひらを合わせれば多分ボクの手のほうが大きいはずだけど、彼女に比べたらボクの拳は出来損ないのいびつなゴムボールだ。

玲央の「 正しい拳の握りかた 」講座は、列車が二苦駅みじまに着くまで延々と続いた。

分かりやすいように丁寧に教えてくれるのは、彼女が他人に教える慣れているというのとは別に、彼女の世話好きな一面を表しているような気がした。それは確かにありがたい話だと思う。

でも、せっかくだから空手以外の話　例えば趣味の話とかをしようと思っていたのだ。デートなんてつもりはなかったけど、二人でゆっくり話ができる機会なんて他に見当たらない。ボクは心の中で魂を吐き出すような深い溜め息をついた。

三苦駅を出ると、玲央は買い物をして帰ると言った。

「亮太はどうすると？　まっすぐ帰ると？」

「別にそんなに急ぐこともないけど。どうして？」

「やったら、買い物付き合つてよ。一人でテクテク歩くと好かんし、特に断る理由もないので、駅から少し歩いて大通りにあるサンリブに入った。福岡では割とあちこちにある地元のスーパーで、デイ・オブ・バースの曲をBGMにしたイメージCMをテレビでしょっちゅう見かける。

お菓子とかジュースでも買うのかと思っていたら、玲央は手押しのワゴンにカゴを載せて、迷うことなく食料品売り場に向かった。

「おつかい？」

「ん……。まあ、そんな感じ」

彼女はメモを見るわけでもなく、目にとまった商品を次々にカゴに放り込んでいった。パンや乾物、調味料、肉、野菜、豆腐やこんにゃく、そのほか、いろんなものをまんべんなく入れるとカゴはすぐに満杯になった。

驚いたのは「何をどれだけ買うか」を玲央が自分で決めていることだった。お使いと言うよりまるで主婦の買い物のようなのだ。

いや、我が家の女性陣よりよほどマシかもしれない。ウチの母親なんか、いつも両手に持ちきれないほど買った拳句、冷蔵庫にどうやって入れるか悩んでばかりいる。その娘である姉貴も似たようなもんだ。どうして、母娘でこんなつまらないところが似なきゃならないんだろ。

ボクがそういったことを話すと、玲央は事も無さげに「ウチ、母

親おらんけんね」と答えた。

「そうなんだ？」

「小学校の六年んときね。ずうつと病氣やったつちやけど、年末に一時帰宅で帰ってきたときに容態が悪うなって、そのまんま」

「……悪いこと訊いちやつたかな？」

「そがんことなかよ。もう三年以上も前の話やし」

「じゃあ、それからはお父さんと二人で？」

彼女に兄弟姉妹がないことは前に聞いていた。

「ずっと二人暮らし。アタシ、この歳ですでに主婦とよ。意外やろ？」

玲央はそう言って笑った。テキパキとした買い物の様子を見ていなかったら、彼女が家事をこなしているところなんて想像もできなかっただろう。

「……ところでさ」

鮮魚売り場でサバを三枚おろしにしてもらっていると、唐突に玲央が言った。

「なに？」

「やっぱり、基礎ばっかりやらされるとは面白くない？」

一瞬、質問の意味が分からなかった。それが道場でのボクの質問と繋がっていることに気づいて、ボクはひどく気まずい　　と言いか、申し訳ない気持ちになった。

「……そんなことないよ。それに三戦の構えができれば、次はいよいよ突きの練習だつて師範代も言つてたしさ」

「嘘つかんでもよかよ」

彼女の声に咎めるようなニュアンスはなかった。

一瞬、嘘をつき続けようかと思った。けれど、それはできなかった。ボクは彼女から目を背けたままで大きな溜め息を洩らした。

「　　つまんなくはない。でも、もどかしい」

「やっぱりね。そがんやなかかな、とは思つとつたつちやけど」

「君、テレパシーでも使えんの？」

「そがん怪しか能力もつとらんけど。だいたい入門してきて一、二週間すると、みんな似たようなこと言い出すもんつたいねえ。やれ、技の練習させるとか、組手やらせるとか。理由はいろいろやけど。最初から空手舐めとう奴もいるし、ただ単に堪え性がなか奴もいるし」

「耳が痛いね」

ボクは玲央を遮った。これ以上話せば、空手を始めようといや、強くなるうと決心した理由を言わなきゃならなくなる。

ところが、彼女はめげずに言葉を続けた。

「あと、そこまで悠長なこと言うたらねん、とかね。一刻も早く強うならないけん理由があつたりして」

「えっ!?!」

「凶星やる?」

否定の言葉を探したけど見つからなかった。彼女が言つとおりだったからだ。

玲央は少しだけ得意そうな笑みを浮かべていた。理由を根掘り葉掘り訊かれるのかと思うと、内心ウンザリした。

けれど、彼女は静かな声で「よかよ、アタシが教えてやるっか?」と言つただけだった。長く鍛錬を続けている彼女からすれば、ボクのように「手っ取り早く強くなりたい」なんて人間は軽蔑されてもおかしくなかった。

そんなボクの焦りを気遣ってくれる彼女の優しさが嬉しかった。

「うーん、そこまで厚かましいことを言うつもりはなかった。」

「うーん、もうちょっと形になるまでは遠慮するよ」

「どうして?」

「まだ命が惜しいから。玲央と組手なんかやつたら、生きて道場を出られる保証はないもんね」

「うっわ、亮太ってアタシのこと、何と思つとつと!?!」

「友だちだよ。君がそう言つたら?」

「……何、それ」

玲央はプウツと頬を膨らませた。

その表情はそれまで見た中で一番かわいかった。笑顔がかわいい子はいくらでもいるけど、怒った顔が魅力的な子にはそれまで会ったことがなかった。

ボクは買い物物の間中、チラチラと玲央の横顔を窺っていた。シチユエーションはちょっと戴けなかったけど、初めての経験にボクはドキドキしていた。

誰だよ、彼女を ザ・ビースト なんて呼んだのは。

4・手料理

スーパーからの帰り道、ようやく話題は格闘技のことを離れて、学校での出来事やボクが知らない先生たちの逸話に及んでいた。

「でね、あいつ、シユートのフォームがどうか言うて、女子の身体に触ろうてするっちゃけん。もう、ホント腹立つ！」

玲央が言うあいつとは去年赴任してきた体育教師のことだった。

彼女がたまに助っ人に駆り出されるバスケットボール部の顧問なんだけど、指導にかなり問題があるらしい。

「それってセクハラじゃないの？」

「じゃないの、やなくて真正正銘のセクハラって。ホント、いつかローリング・ソバットで蹴っ飛ばしちゃうって思っとうとよ」

「そのときは呼んでほしいな。ちゃんとリングサイドS席の料金払うから」

「場外乱闘に巻き込まれても知らんよ？」

二人で爆笑していると、玲央の携帯電話が鳴った。彼女はディスプレイを見て少し迷ったけど、手ぶりで断りを入れて電話に出た。

ボクは礼儀正しく彼女のそばを離れた。

「……もしもし、どうしたと？」

ちよつとぶつきらぼうな声。それが急に怒鳴り声と言っている大きな声に変わった。

「ちよつと待ってって、来られんってどがんことッ!？」

しばらく無言。眉根を寄せたキツイ眼差しは今にも誰かに殴りかかりそうな凶悪さだった。

「ねえ、あんた何考えとうとって。あんたが食べたかって言うたけん、準備しとうとよ!？」

再び無言。たぶん、相手が言い訳をしているのだろう。憤怒の表

情は徐々に和らいできているけど、それでも怒りと失望のオーラが彼女のまわりに漂っていた。

「……分かった。うん、じゃあね」

ディスプレイを一睨みして、彼女は電話を切った。

「どうしたの？」

訊かないほうがいいような気がしたけど、何事もなかったように話せる雰囲気じゃなかった。しばらく無然とした顔だった玲央は、やがて照れたように苦笑いした。

「父さんの同僚で、ウチにご飯たかりに来る半居候がおるっちゃけどねえ。そいつが仕事で急に来られんことなつたって」

「その人の分のご飯も準備してたの？」

「そうよあ。まったく、イワシの生姜煮が食べたかとか言うけん、ちゃんと霜降りまで済ませてあつたとに」

「霜降り？」

それって肉の用語じゃないのかというボクの質問に、玲央はちょっと得意げな表情を浮かべた。それは魚介類の下ごしらえを指す用語でもあって、熱湯をサツと通した後に冷水で洗うことで臭みやぬめりをとることを言うのだそつだ。

「君、料理、得意なの？」

「あーっ、亮太、アタシのことバカにしとつやる？ これでも家庭科と体育だけはーっつと五なんやけんね」

体育は納得だけど家庭科の五はちよつと意外だった。でも、彼女が言うように「この歳ですでに主婦」なら、中学校の家庭科の課題くらいは朝飯前なのかもしれない。

「自分は食べるだけやけんて勝手なもんよねえ。フン、奥さんにご飯も作ってもらえんダメ亭主のくせにさ」

玲央はまだ憤懣やるかたないといった感じだった。それにしてもえらい言われようだな。

「イワシの生姜煮かあ。美味しそうだね」

とりなすつもりで言っただけのつもりだった。ところが玲央の顔

がパツと明るくなった。

「亮太つて魚、好きと？」

「そうだね、どっちかって言うとお肉より魚派。脂っぼいのが苦手です。だから痩せっぽちなんだって言われるけど」

「へえ、やったら、家でも魚がメイン？」

「ところがそうでもないんだな、これが。父さんが大の魚嫌いだね。我が家では煮魚は滅多に食卓に上らないんだ」

「ふうん……。ねえ、代わりに食べてく？」

そう言つて、玲央はすぐに「……あ、もう家で用意しよう時間やね」と付け足した。みっちり練習したせいで時計はすでに六時を過ぎていた。

どうしようかなと少しだけ迷つて、ボクは口を開いた。

「……んー、まあ、家に帰つても、何にも用意されてないんだけどねー」

「なんで？ どっかに食べに行くと？」

「そうじゃないよ。茨城の爺ちゃんが畑でぶつ倒れて入院したんで、母さんが実家に帰っちゃってるんだ。なのに、父さんは接待ゴルフでいないし」

「お姉ちゃんは？ おるて言いよつたよね？」

「残念。ウチの姉貴は料理はまったくダメなんだ。たぶん、ボクのほうが上手い」

「やったら、食べに来たらいいやん。ウチも父さん遅いし、アタシも一人で食べるのつまらんしさ」

「いいの？」

「もちろん。よし、決まりっ！！」

ひよんなことから女の子の家に行くことになり、しかも手料理をご馳走になるという僥倖に、ボクの頬は自分で分かるほどゆるんでいた。

しかし、ふと、半年ほど前に我が家で起きた悲劇が脳裏をよぎった。姉貴が同級生のボーイフレンドを家に呼んで手料理を振る舞っ

たときのことだ。

料理の見た目はそれほど悪くはなかった。ただ、最初の一口を食べたボーイフレンドの眉間に刻まれた皺が味の酷さを物語っていた。それでも彼には「こんなの食えるかッ！」と怒鳴って卓袱台をひっくり返す、という選択肢は用意されていなかった。彼は悲痛な笑顔を浮かべながら黙々とテーブルの上の料理を口に運んだ。

最初のうちは彼も善戦した。姉貴の目を盗んで水で流し込む。ああ、なんて美味しそうに飲んでいたことか！！　という高等テクニクも見せてくれた。

しかし、ごまかしは所詮、ごまかしでしかなかった。徐々に食べるペースは遅くなっていき、最後にはまったく箸が進まなくなっていた。ダイニングをチラチラと覗いていたボクには、そのボーイフレンドが何発もボディブローを喰らって、残酷なほど確実に力を奪われていくボクサーにしか見えなかった。ボクは生まれて初めて、男に生まれることの辛さを目の当たりにすることになった。

料理が好きなことと料理が上手なことの間には残念ながら天と地ほどの隔りがある。主婦の誰もが料理が上手だというわけでもない。

安易に喜んでいるけど、玲央は大丈夫なんだろうか？

「　　うっわ、やっぱいよ、コレ！」

頭が悪そうなので普段は使わないようにしている感嘆詞が、思わず口を衝いて出た。

心配はまったくの杞憂だった。それどころか、ボクは男に生まれることの喜びを感じていた。気になり始めてる女の子の手料理が美味いこと以上の幸せがこの世にあるだろうか。

料亭や割烹で出てきそうな茶色の器に盛られたイワシは美味しそうな煮汁の色に染まっている。上には針生姜が天盛りにしてある。市販のものじゃなくて、玲央が小さな包丁で刻んでいたものだ。一

緒に煮たダイコンにもしつかり味がついている。ちゃんと下ごしらえがしてあるからか、臭みはまったく感じられない。

付け合せはだし巻玉子と冷奴、ナスと油揚げの味噌汁。ご飯はしつかりコメが立っていてツヤツヤだった。他にも遠縁の親戚から送ってきた高菜漬のバター醤油炒めと、これも彼女のお手製だという筑前煮を温めて出してくれた。最後の一つは「昨日の残りなんだけど……」と申し訳なさそうだったけど、実はそれが一番美味しかった。

「ご飯、お替りなしじゃ足りんくなかった？」

「そんなことないけど。どうして？」

「男の子やけん食べるかなーって。父さんもあいつも米粒あんまり食べんし、それで普段からそんなに炊かんとよね。炊いて冷凍した奴でよかならあるけど？」

「大丈夫だよ、おかずでお腹いっぱいになりそうだから」

あいつというのはこんなに美味しい生姜煮を食べ損ねた半居候のことだろう。彼女が台所で料理をしている間、待たされていた居間の写真でその人の顔は見ていた。

バックはどこかの遊園地の入場口だった。今よりもちょっとだけぼつちやりした玲央の隣に、彼女が普通の背丈に見えるほど背が高いハンサムな男が写っていた。茶色がかった長髪とメタルフレームのメガネのせいであまり警察官っぽくはない。どっちかと言えば、白衣を着て研究室にいるほうが似合っている感じだ。玲央を挟んだ反対側には東南アジアっぽい濃い顔立ちの女の人が写っていた。たぶん、そっちがご飯を作ってくれない奥さんなんだろう。

特別に意識する対象じゃないし、したってしょうがないことも分かっている。けれど、玲央が口にする あいつ という言葉に見え隠れする親しげな響きはボクの胸を重くした。

二人できれいに食べ物を平らげて、彼女の部屋に移動した。彼女は自分の机の椅子に、ボクは他に椅子がないのでベッドの縁に腰を下ろした。

「あー、美味しかった」

「ありがと。そがん言うてもらえるとが一番よねえ」

玲央は二人分のお茶を運んできてくれていた。彼女は大のコーヒー党だけど、さすがに和食の後で飲む気はしないようだ。

アパートの七階の部屋は窓を開けておくと、いい感じに風が抜けて涼しかった。外のいろんな音が流れ込んできていて、二人で押し黙っていても静かというわけじゃない。もともとお互いにおしゃべりというわけでもないの、そうしていてもあまり気詰まりな感じはしない。

しかし、ずっとそのままというわけにもいかない。

生まれて始めて一人で女の子の家に遊びに来たという事実、ボクは今さらながらドギマギしていた。しかも家族は誰もいない文字通りの二人つきりだ。何か話さなきゃと思えば思うほど、何を話題にすればいいのか分からなくなる。

宮地岳線に乗り込む前にあれほどやったシミュレーションは、まったく役に立たなかった。

「ねえ、亮太」

不意に玲央が口を開いた。ボクは声が裏返りそうになるのを懸命にこらえた。

「な、なに？」

「アタシとおったらつまらん？」

「……どうして？」

「さつきからずつつと黙つとうけん。ま、しょうがなかよね。」

共通の話題って言うても空手しかなかし」

「……いや、そんなことないけど」

けど、なんだ。

自分で自分に思いつきりツッコミを入れてみる。ボクは助けを求めようと部屋を見回した。何もなければこの際、さっきの写真の夫婦でもいいからネタにするつもりだった。

ふと、机の上のフォトスタンドに目が止まった。写っているのは

面長のきれいな女の人だった。

「あれ、君のお母さん？」

「ん？ うん、そう。なかなか美人やる？」

目許は玲央より柔らかくて、くつきりした切れ長の二重瞼が印象的だ。緩やかなウェーブがかかったセミロングの髪がとても似合っている。自分の母親と比較してしまうせいか、同級生の母親は実際以上に綺麗に見えることが多いけど、その分のバイアスを差し引いても写真の女性は別格の美人だった。

玲央ももう少し大人になって髪を伸ばしたら、こんな感じになるんだろうか。

「誰かに似てるね」

「誰？」

「小野リサって知ってる？ ボサ・ノヴァ歌手の人だけど」

「ああ、誰かに言われたことある」

玲央はうつすらと儂げな笑みを浮かべた。得意げな響きと寂しさが入り混じったような不思議な声音。しかし、それは急にからかうような勝気な笑みに取って代わられた。

「あのさあ、言ったら悪かけど、小野リサの顔とかファンでもなかなか知らんよ？ まさか、そんな歳でボサ・ノヴァとか聴くと？」

「……悪いかよ」

ボクは流行りのJ・POPやラップ、ヒップホップにはまるで興味がない。アイドルなんて論外だ。姉貴のせいでヒット曲くらいは耳に入ってくるけど、そうでなければまず聴こうとも思わない。さすがにまだジャズにどっぷりはまる気はしないけれど、そうは言いつつこの前、天神のタワーレコードでジョシユア・レッドマンのアルバムを買ってしまった。

「ジジくさあ……」

玲央は呆れたように言い放った。言い返そうにも自覚があるので言葉が出てこない。

「悪かったね。そういう玲央はどんな曲を聴くのさ？」

「アタシ？ アタシはねえ……デレク・アンド・ザ・ドミノスとか、ダリル・ホール・アンド・ジョン・オーツとか。あと、ジプシー・キングス」

「誰だよ、それ？」

いや、ボクだってホール・アンド・オーツくらい知ってる。デレク・アンド・ザ・ドミノスもエリック・クラプトンが在籍したバンドだということは知ってるし、曲も三菱のクルマのCMで使われているからそれだけは知ってる。ただ、どっちもボクらの世代が聴いてるバンドじゃない。第一、デレク・アンド・ザ・ドミノスはもう存在しない。ジプシー・キングスは本当に知らない。

「なんだよ、自分だってババくさいじゃん。普通、女の子っていえばB'zとかケミストリーとか、そうじゃなきゃ、ジャーニーズ系にキヤーキヤー言ってるもんじゃないの？」

「冗談言わんでよ。アタシにそがんと似合っと思っ？」

玲央は顔をしかめて大袈裟な溜め息を洩らした。ボクも思わず苦笑いしてしまった。アイドルの顔が印刷された団扇をもって飛び跳ねる玲央なんて、確かに想像もつかない。

ボクはテレビの横にあるコンポのラックを見た。そこに並べてあるCDはほとんどが洋楽のものだ。中には知ってるバンドのものもあるけど、大半はそうじゃないものだった。

「洋楽、好きなんだね」

「父さんがそがんとばかり聴くし、それで育ったけんね。でも、最近の曲も聴くとよ」

何か聴いてみたいと言うと、玲央は少し考えてシエリル・クロウの If Makes You Happy という曲を選んだ。そんなに最近の曲でもないような気がするけど、愛しのレイラよりは確かに新しい。

玲央はメロディに合わせて小声で歌を口ずさんでいた。

意味を理解してるのかどうかは分からないけど、適当な怪しい英語じゃなくて、ちゃんと歌詞を覚えているようだった。ハード・口

ツクっぽい歪んだギターが奏でるゆったりしたメロディと、玲央の低くてちよつとハスキーな声は意外に合っていた。

「へえ。歌、上手いなだね」

「そう?」

曲が終わってボクがそう言うと、玲央は照れ臭そうにはにかんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2288y/>

ブラジリアン・ハイキック ~天使の縦蹴り~

2011年11月6日06時14分発行